線形代数 II 第6回講義資料

担当:大矢 浩徳 (OYA Hironori)*

前回までの講義資料で一般のn次正方行列の対角化可能性の判定および対角化の手順について,理論的な側面も含め一通り解説を行った。次回以降,実対称行列,およびエルミート行列と呼ばれる特別な行列の対角化について,さらに詳細なことを解説する。今回はそこへ向かう前の(大事な)寄り道である。まず,前回の証明において行った考察の応用として,任意の(複素)n次正方行列Aに対して,複素n次正方行列Pが存在し, $P^{-1}AP$ が上三角行列になるという事実を証明する(=角化可能性)。対角化は可能な場合と不可能な場合があるが,三角化はいつでも可能なのである。さらにこの事実の応用として,ケイリー・ハミルトンの定理 $(Cayley-Hamilton\ theorem)$ と呼ばれる定理を証明する。

6.1 正方行列の三角化とケイリー・ハミルトンの定理

本節では正方行列の三角化とその応用としてのケイリー・ハミルトンの定理について述べよう. まず, 三角化とは以下のようなものである.

- 定義 6.1 —

A を n 次正方行列とする. ある正則な n 次正方行列 P が存在して

$$P^{-1}AP$$

が上三角行列となるとき,A は P によって三角化されるという.ここで,上三角行列とは

$$\begin{pmatrix} c_1 & * & * & \cdots & * \\ 0 & c_2 & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & * \\ 0 & 0 & \cdots & 0 & c_n \end{pmatrix}$$

という形の行列 (* には 0 とは限らない \mathbb{K} の元が入っている) で、特に対角成分 c_1, c_2, \ldots, c_n は 0 とは限らないものを考える。 $(c_1=c_2=\cdots=c_n=0$ となる上三角行列は狭義三角行列と呼ばれる。)

以降本節の中では $\mathbb{K} = \mathbb{C}$ とする (理由は後に述べる). すでに見てきたように, n 次正方行列 A には対角化可能なものと対角化不可能なものが存在したが, 実は三角化は (複素行列を用いれば) 常に可能である.

 $^{^*}$ $e ext{-}mail:$ hoya@shibaura-it.ac.jp

定理 6.2

A を n 次正方行列とする. このとき、A はある複素正方行列 P によって三角化される. さらに、三角化の結果が

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & * & * & \cdots & * \\ 0 & \lambda_2 & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & * \\ 0 & 0 & \cdots & 0 & \lambda_n \end{pmatrix}$$

という形になるならば、Aの固有多項式 $\Phi_A(t)$ は

$$\Phi_A(t) = (t - \lambda_1) \cdots (t - \lambda_n)$$

と因数分解される.ただし, $\lambda_1, \ldots, \lambda_n \in \mathbb{C}$ には重複もあり得る.すなわち,対角成分には必ず A の各固有値が重複度の数だけ現れる.

証明・行列のサイズ n に関する帰納法で三角化可能性を示す。まず,n=1 のときは任意の 1×1 行列 (a) は上の定義で上三角行列とみなせるので,主張は自明である。次に任意の n 次正方行列が三角化可能であったと仮定して,n+1 次正方行列 A の三角化可能性を示す $(n\geq 1)$. このとき,A の固有方程式 $\Phi_A(t)=0$ は未知数 t に関する n+1 次方程式なので,必ずある複素数解 λ をもつ。(代数学の基本定理。 ここで $\mathbb{K}=\mathbb{C}$ を用いた!。 実数の範囲では一般には解を持たないかもしれない。)すると,A は固有値 λ の固有ベクトルを持つのでそれを p_1 とする。このとき,定理 5.1 より,ある $p_2,\ldots,p_{n+1}\in\mathbb{K}^{n+1}$ が存在して, p_1,p_2,\ldots,p_{n+1} が \mathbb{K}^{n+1} の基底となるようにできる $(p_2,\ldots,p_{n+1}\in\mathbb{K}^{n+1}$ は A の固有ベクトルとは限らない)。すると系 4.5 より,

$$\tilde{P} = (\boldsymbol{p}_1 \ \boldsymbol{p}_2 \ \cdots \ \boldsymbol{p}_{n+1})$$

は正則である。行列の積の定義より, $ilde{P}e_1=p_1$ なので,両辺に $ilde{P}^{-1}$ を左から掛けて $e_1= ilde{P}^{-1}p_1$ となることに注意すると,

$$ilde{P}^{-1}A ilde{P} = ilde{P}^{-1}(Aoldsymbol{p}_1\ Aoldsymbol{p}_2\ \cdots\ Aoldsymbol{p}_{n+1})$$

$$= ilde{P}^{-1}(\lambdaoldsymbol{p}_1\ Aoldsymbol{p}_2\ \cdots\ Aoldsymbol{p}_{n+1})\ (oldsymbol{p}_1\ A\ O\ B\ Aoldsymbol{p}_n\ Aoldsymbol{p}_n\ Aoldsymbol{p}_{n+1})$$

$$= (\lambdaoldsymbol{e}^{-1}oldsymbol{p}_1\ oldsymbol{P}^{-1}Aoldsymbol{p}_2\ \cdots\ ilde{P}^{-1}Aoldsymbol{p}_{n+1})$$

$$= \begin{pmatrix} \lambda & b \\ \hline \mathbf{0} & B \end{pmatrix}$$

という形になる.ここで, ${m b}$ はある $1 \times n$ 行列, ${m B}$ はある n 次正方行列, ${m 0}$ は n 次ゼロベクトルである*1.ここで,帰納法の仮定より,ある n 次正則行列 ${m Q}$ が存在して,

$$Q^{-1}BQ = \begin{pmatrix} \lambda_1 & * & * & \cdots & * \\ 0 & \lambda_2 & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & * \\ 0 & 0 & \cdots & 0 & \lambda_n \end{pmatrix}$$

とできる. この Q を用いて, n+1 次正方行列を

$$ilde{Q}\coloneqq \left(egin{array}{c|c} 1 & {}^t0 & \\ \hline 0 & Q & \end{array}
ight)$$

 $^{^{*1}}$ ここでの計算は第 5 回講義資料 5.2.2 節の事実 4.1 (1) の証明で用いた手法と同様である.

とすると、 \tilde{Q} は正則で、

$$\tilde{Q}^{-1} = \begin{pmatrix} 1 & {}^t \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & Q^{-1} \end{pmatrix}.$$

さらに,

$$P \coloneqq \tilde{P}\tilde{Q}$$

とすると、Pも正則なn+1次正方行列である。これを用いると、

$$\begin{split} P^{-1}AP &= \tilde{Q}^{-1}\tilde{P}^{-1}A\tilde{P}\tilde{Q} \\ &= \tilde{Q}^{-1} \left(\begin{array}{c|ccc} \lambda & b \\ \hline 0 & B \end{array}\right) \tilde{Q} \\ &= \left(\begin{array}{c|ccc} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \hline 0 & Q^{-1} \end{array}\right) \left(\begin{array}{c|ccc} \lambda & b \\ \hline 0 & B \end{array}\right) \left(\begin{array}{c|ccc} 1 & {}^t\mathbf{0} \\ \hline 0 & Q \end{array}\right) \\ &= \left(\begin{array}{c|ccc} \lambda & bQ \\ \hline 0 & Q^{-1}BQ \end{array}\right) \\ &= \left(\begin{array}{c|ccc} \lambda & bQ \\ \hline 0 & \lambda_1 & * & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & \lambda_2 & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & 0 & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & * \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & 0 & \lambda_n \end{array}\right) \end{split}$$

と三角化できる.以上より,三角化可能性は示された.

後半の主張については,

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & * & * & \cdots & * \\ 0 & \lambda_2 & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & * \\ 0 & 0 & \cdots & 0 & \lambda_n \end{pmatrix}$$

となるとき, 命題 3.3(4)より,

$$\Phi_{A}(t) = \Phi_{P^{-1}AP}(t) = |tI_{n} - P^{-1}AP| = \begin{vmatrix} \begin{pmatrix} t - \lambda_{1} & *' & *' & \cdots & *' \\ 0 & t - \lambda_{2} & *' & \cdots & *' \\ 0 & 0 & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & *' \\ 0 & 0 & \cdots & 0 & t - \lambda_{n} \end{vmatrix} = (t - \lambda_{1}) \cdots (t - \lambda_{n})$$

となることからわかる.

三角化可能性からケイリー・ハミルトンの定理と呼ばれる重要な定理が証明される.

定理 6.3(ケイリー・ハミルトンの定理 (Cayley–Hamilton theorem)) -

A を n 次正方行列とし, $\Phi_A(t)$ をその固有多項式とする.このとき,

$$\Phi_A(A) = O.$$

ここで, $\Phi_A(A)$ は固有多項式の変数 t に行列 A を代入して計算して得られる n 次正方行列 (ただし定数項 $(-1)^n|A|$ は $(-1)^n|A|I_n$ に置き換える),O は n 次正方ゼロ行列を表す.

証明. 定理6.2 より, A はある複素正方行列P によって,

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & * & * & \cdots & * \\ 0 & \lambda_2 & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & * \\ 0 & 0 & \cdots & 0 & \lambda_n \end{pmatrix}$$

という形に三角化される. このとき, $\Phi_A(t)=(t-\lambda_1)\cdots(t-\lambda_n)$ となるので, 示すべきことは

$$(A - \lambda_1 I_n)(A - \lambda_2 I_n) \cdots (A - \lambda_n I_n) = O$$

である. ここで,

$$(A - \lambda_1 I_n)(A - \lambda_2 I_n) \cdots (A - \lambda_n I_n) = O$$

$$\Leftrightarrow P^{-1}(A - \lambda_1 I_n)(A - \lambda_2 I_n) \cdots (A - \lambda_n I_n)P = O$$

$$\Leftrightarrow P^{-1}(A - \lambda_1 I_n)PP^{-1}(A - \lambda_2 I_n)P \cdots P^{-1}(A - \lambda_n I_n)P = O$$

$$\Leftrightarrow (P^{-1}AP - \lambda_1 I_n) \cdots (P^{-1}AP - \lambda_n I_n) = O$$

という同値関係が成り立つので、最後の式を示せば良い、ここで、最後の式の左辺の積

$$\begin{pmatrix} 0 & * & * & \cdots & * \\ 0 & \lambda_2 - \lambda_1 & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & * \\ 0 & 0 & \cdots & 0 & \lambda_n - \lambda_1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \lambda_1 - \lambda_2 & * & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & * & \cdots & * \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & * \\ 0 & 0 & \cdots & 0 & \lambda_n - \lambda_2 \end{pmatrix} \cdots \begin{pmatrix} \lambda_1 - \lambda_n & * & * & \cdots & * \\ 0 & \lambda_2 - \lambda_n & * & \cdots & * \\ 0 & 0 & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & * \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & * \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots & \ddots & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \vdots & \ddots & \ddots &$$

を左から順に具体的に計算すると O となることが確かめられる. *2 これより、示すべきことは示された. \Box

注意 1. この節では $\mathbb{K} = \mathbb{C}$ とすると仮定したが、実数は複素数の一部なので、ケイリー・ハミルトンの定理はもちろん実行列に対しても成立する.

例 1. 2 次正方行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ の固有多項式は、

$$\Phi_A(t) = |tI_2 - A| = \left| \begin{pmatrix} t - a & -b \\ -c & t - d \end{pmatrix} \right| = t^2 - (a + d)t + (ad - bc)$$

となるので、ケイリー・ハミルトンの定理より、

$$A^{2} - (a+d)A + (ad - bc)I_{2} = O.^{*3}$$

このように "一つ掛けるごとにゼロベクトルの列が一つ増えていく" という形になり、最終的に O になる.一般的な形の証明を書くことにも是非チャレンジしてもらいたい.

 $^{^{*2}}$ 状況のわかりやすさのため,n=6 の場合に様子を見てここの計算を "納得" してみよう.

^{*3} 直接検算してみると確かに正しいことがわかるだろう.

例えば,

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 4 \end{pmatrix}$$

のとき,

$$A^2 - 5A - 2I_2 = O$$
, すなわち, $A^2 = 5A + 2I_2 = \begin{pmatrix} 7 & 10 \\ 15 & 22 \end{pmatrix}$

が確かに成立している.

例 2. 3 次正方行列 $A = \begin{pmatrix} -3 & 4 & 1 \\ -2 & 2 & 2 \\ 1 & 0 & 1 \end{pmatrix}$ の固有多項式は、

$$\begin{split} \Phi_A(t) &= |tI_3 - A| = \begin{vmatrix} t+3 & -4 & -1 \\ 2 & t-2 & -2 \\ -1 & 0 & t-1 \end{vmatrix} \end{vmatrix} \\ &= \begin{vmatrix} t+3 & -4 & -1 \\ 0 & t-2 & 2t-4 \\ -1 & 0 & t-1 \end{vmatrix} \quad (第 2 行に第 3 列の 2 倍を加えた) \\ &= \begin{vmatrix} t+3 & -4 & 7 \\ 0 & t-2 & 0 \\ -1 & 0 & t-1 \end{vmatrix} \quad (第 3 列に第 2 列の - 2 倍を加えた) \\ &= (t-2) \begin{vmatrix} t+3 & 7 \\ -1 & t-1 \end{vmatrix} = (t-2)(t^2 + 2t + 4) = t^3 - 8 \end{split}$$

となるので、ケイリー・ハミルトンの定理より,

$$A^3 - 8I_3 = O$$
, $\Rightarrow \Rightarrow \Rightarrow A^3 = \begin{pmatrix} 8 & 0 & 0 \\ 0 & 8 & 0 \\ 0 & 0 & 8 \end{pmatrix}$

となることがわかる. これを用いれば, 例えば

$$A^{100} = (A^3)^{33} A = (8^{33} I_n) A = 2^{99} \cdot \begin{pmatrix} -3 & 4 & 1 \\ -2 & 2 & 2 \\ 1 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

というような計算ができる.